2016年(平成28年)2月20日(土)　毎日新聞

「自分が考えるいじめとは」を発表する女子生徒ら＝大阪市西区の大阪YMCA国際専門学校で

いじめ考える授業

大阪の専門学校 24日の撲滅デー前に

世界的ないじめ撲滅運動「ピンクシャツデー」（2月24日）が、日本でも広がっている。大阪YMCAは保育園や高校など運営する各事業所で、コンサートやポスター掲示などのキャンペーンを展開。15日には、大阪市西区の大阪YMCA国際専門学校高等課程の「表現・コミュニケーション学科」で、いじめを考える授業があった。

ピンクシャツデーは2007年、カナダの2人の学生が始めた運動。ピンク色のシャツを着て登校した男子生徒が「ゲイ」といじめられていたため、2人が友人にピンクシャツを配布。大勢の生徒がそのシャツを着て登校したエピソードが広まり、毎年2月の最終水曜日が「デー」になったという。

授業があった同学科は、生徒の約7割が小中学校で不登校を経験し、背景にいじめがあったケースもある。3年生約25人が「自分にとって、いじめとは何か」「いじめを受けた人は何をしてほしいと思うか」を発表。過去の体験を明かし、「嫌と言えるようになりたかった」「逃げ道を用意してほしかった」と話す生徒もいた。

24日当日は、各事業所の職員がピンク色のものを身につけて運動をアピール。通信制・単位制高校の生徒と2～3歳児の交流イベントも予定されている。

大阪YMCA国際専門学校の鍛治田千文副校長は「キャンペーンを多様な人の存在を認め合う機会にしたい」と話す。【反橋希美】